

てんか たいかいふた そ いち めい そ いち ぎ こ おや  
 天下に大戒二つあり。其の一は命なり。其の一は義なり。子の親を  
 あい めい こころ と しん きみ つか ぎ  
 愛するは命なり、心より解くべからず。臣の君に事うるは義なり、  
 ゆ きみ あら てんち あいだ のが ところ これ  
 適くとして君に非ざることなし。天地の間に逃るる所なし。是を  
 たいかい い みずか そ こころ つか もの そ いかん  
 大戒と謂う。自ら其の心に事うる者は、其の奈何ともすべからざ  
 し これ やす めい したが とく いた もと や  
 るを知りて、之に安んじ命に若うは、徳の至りなり。固より已む  
 え とところ こと じよう おこな そ み わす なん せい よろこ  
 を得ざる所あり、事の情を行いて其の身を忘る。何ぞ生を悦びて  
 し にく いた いとま  
 死を悪むに至る暇あらんや。

【大体の意味内容】

この世界には大きな戒めが二つある。その一つは運命、すなわち生命運動であり、もう一  
 せかい おお いまし ふた ひと うんめい せいめいうんどう  
 つは忠義すなわち心のご真ん中を貫く正義である。子が親を愛し慕うのは本質的生命  
 ちゅうぎ こころ ま なか つらぬ せいぎ こ おや あい した ほんしつてきせいめい  
 運動なのであって、心から切り離そうとすべきではない。臣下が君主に仕えるうえでの  
 うんどう こころ き はな しんか くんしゅ つか  
 忠義とは、人が社会で生きる上での規範のことである。君主が先にあつて、無理に仕える  
 ちゅうぎ ひと しゃかい い うえ きはん くんしゅ さき むり つか  
 のではなく、人がより善く生きる規範を作り上げた結果、その象徴として君主が存在を  
 ひと よ い きはん つく あ けつか しょうちよう くんしゅ ぞんざい  
 認められているに過ぎない。自然の生命運動と偽らざる正義、天地の間でこの二つから  
 みと す じねん せいめいうんどう いっわ せいぎ てんち あいだ ふた  
 逃れられるところはない。これを大戒というのである。自分の本源的な意志としての心意  
 のが でんしょう したが もの はたら こじん せいめいうんどう すなお したが さいこう ありさま  
 伝承に従う者は、その働きが個人のちっぽけな自我ではどうにもならないことをわきま  
 えられる。心意伝承に安らぎ、生命運動に素直に従うことが、最高の徳なのだ。もと  
 しんい でんしょう したが やす せいめいうんどう すなお したが さいこう ありさま  
 より生きてゆくうえでは、つまり食べてゆくうえでは理想論を却下し、それぞれの事情で  
 い たり くい せいめいうんどう けつか せいめいうんどう じじよう  
 仕事をして、我が身の幸福を忘れがちだ。生きる悦びを感じたり、いずれ死ぬということ  
 しごと わ み こうふく わす い よろこ かん し

けんお　を嫌悪したりする暇が、どうしてあるだろうか。（いっけん　何なにも考かんえずにひたすら食たべてゆ  
いとま  
ひっし　くことに必死ひっしになつてゐることが、案外あんがいそうした生命運動せいめいうんどうや正義せいぎのありがたさに氣きづくき  
つかけになつたりもするものだ）。

この塾業界で仕事をするようになって初めのころは、何をどうやってもうまくいかず、上司たちからも自分の存在を全否定される日々が続いて本当につらかったことがあります。生徒たちの前に立って授業するのが恐ろしくて、毎日、一日中心臓が早鐘を打ち続けるほどのプレッシャーに苛まれていました。

そんなある日、寝ている間に心臓が止まってしまったことがありました。やかましいほどくどくど鳴っていた心臓の鼓動が極端にゆっくりになったかと思うと、三度なり、二度なって、一度、

そして、鳴らなくなりました。

え、止まった？  
心臓が止まった？

不思議と平安な気分になりました。

このまま死ぬのかな。そしたら、楽になれるな、もうプレッシャーから解放される。

そんな風に思いました。

横にはまだ赤ん坊の子どもが寝ている。このまま死んだら、家族は悲しんでくれるだろう。

いや、怒るだろうな。きっとばれるだろう、「無抵抗死」だったって。生きようと頑張らなかつたって。それに、

やつぱり死ぬのは嫌だ。

いやだ、嫌だ、いやだ嫌だいやだ！

間に合うか？

だいぶ時間たっていないか？

全身の力を自分の真ん中に集める。ちくしょう、畜生、ちくしょう畜生ちくしょう畜生！

どくろ。

鳴  
つ  
た  
：

[illegible]

そんなことが、ありました。心臓が休まず、鳴り続けていることのありがたさ、日が昇り、あぐせく働き、日が沈み、飯を食い、風呂に入り、ひいひい言いながら明日の授業の準備をする、そんな一瞬一瞬でも、有り難い、素晴らしいことなのだと、だんだん分かってきました。毎日を、実はとても生きづらい思いをしながら過ごしているのは本当は生徒たち自身なのだと、生々しく感じながら、なるべく子どもたちの気持ちに沿いながら一緒に生きてゆこうと思ひなおしたりしました。

『莊子』のこのくだりは、できれば避けたい自己喪失の生き方も、逆に日常茶飯の自分本来の生き方が、いかに奇跡であったかを、改めて実感させてくれているのだと思います。